
行ったり来たり～君と僕とのRendez-Vous～

尖角?...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行ったり来たり君と僕とのRendez-Vous

【Nコード】

N0686Y

【作者名】

尖角?...

【あらすじ】

好きな人が、17歳で死んでしまった主人公。

彼女の“笑い”を忘れることが出来なくて、主人公は“笑い”で自分を縛る。

すると、ある日、主人公は彼女と出会うことに。

君の死を僕は痛む。(前書き)

7話完結であり、毎日連載します。

そして、あえて、主人公の名前をはじめとした登場人物の名前を出していません。

また、終わり方も少し飛んでますが、あえてそうしたもののなので、ご理解の程、宜しくお願いします。
ではどうぞ!!!!

君の死を僕は痛む。

僕は、君の瞳に、、僕は、君の胸に、、

僕は、君の心に、、僕は、君の愛に、、

僕は、君の夢に、、僕は、君に対し惹かれた。

他にも君の好きなところは沢山ある。

言葉なんかじゃ、表せないほど多くのものが。

けれども、今の僕が言いたいのはそんなことじゃない。

とにかく、胸がはち切れそうなくらい、「君が好きだという事」。

これは、おふざけなんかじゃなく、僕の本気中の本気。

11月15日、午後7時半、、

今は、君の葬式の真っ最中。

君は、僕に別れを告げずに逝ってしまった。

享年、17歳。

本当に若くて、高校卒業すらできなかった君。

そして、君のためにクラスの子はみんな泣いている。

でも、僕は泣くことはしない。

いつも、学校で笑顔を絶やさなかった君のように、

僕も出来るだけ泣かないようにして、、

君が消えてしまわないように、僕は泣くのを我慢している。

結局、臆病で「好き」の一言もまともに言えなかった僕。

君は、僕の気持ちに気が付いていたのかな？

毎日、一緒に過ごして、その中で僕は君に恋をした。

それは君が“可愛いから”というのも、理由になってしまいかもしれない。

でも、それは一番の理由なんかじゃないんだ。

君と一緒にいると、、君と話していると、、君の隣にいると、僕は楽しく過ごせるから。

君の隣だと、幸せな気持ちになれたから。

だから僕は、君を好きになった。

なのに君は――――。

君に幸せが、届きますように。

君は交通事故で亡くなったわけだけど、僕はその現場にいなかったから、よくわからない。

話を聞いた限りでは、相手のトラックの信号無視らしいね。

理由は、暗くてよく見えなかったから。

けれど、検査が物語ってたよ。

ただの飲酒運転だってね。しかも、意識が飛ぶぐらいの量のね。

あれから一週間、、

君の葬式の後、クラスの皆はなんだか少しだけぎこちなかった。

けれども、一週間たった今、だんだんと皆は笑えるようになってきた。

最初は、ぎこちなく。今は、普通の一手手前ってね。

それは良い事だ。うん、本当にそう思う。

でも、それは良い事なんだけど、君の面影がクラスから消えるような気がして、僕はとても嫌なんだ。

けれど、僕も皆に愛想を振りまく他なかったんだ。

別に、僕と君とが付き合っていたわけでもないし、他の子が僕を心配する要素など一つもないのだから、僕は笑うことしかできなかった。

それは、自分を守るためでもあった。

でも、それは君の“象徴”だと思う。

『だから、許されるだろう』と思った。

そして、僕は思ったのだ。

『もっと、君のために笑わなければ——』とね。

僕の前から、そんな日がいくつも過ぎ去っていった。

僕は泣かずにひたすら笑った。それはもう、君のためだけに。

この恋が、君に繋がるわけでもないのに。

君に届くわけでもないのに、僕はひたすら笑った。

『君に幸せが届きますように』と――――。』

僕と君との、二度目の出会い。(前書き)

この3話目は、文字数が極端に？少ないです。
すみません、、ではどうぞ！

僕と君との、二度目の出会い。

『愛は、愛だけでは終わらない』

これは、大学生になった僕に、誰かが言っていたセリフだ。

今は誰が言ったのかすら、覚えていない。

それくらい、気にも留めてなかったセリフを、なぜか僕は覚えていた。

それは、僕の愛は、、僕の恋は、、過去のものだから。

戻ることのできない愛に、、戻ることのできない恋に、、未練なんていらなから。

そう思っていたのに、不思議とあきらめがつかなくて。

でも、そんな時に、二度と関わるはずのなかった君という存在に出逢ったんだ。

11月14日、深夜0時、前後、

それは、君が亡くなってから、ちょうど3年と4時間が経った頃だった。

“ヒューン” “ドーン” “!?!?!”

体には、「痛い」という声だけが響き渡る。

なぜだろう？

今日は、君が事故にあった日。

その日と同じ日に、僕も事故に遭う。

これは偶然だろうか？ それとも必然だろうか？

とにかく、そんな時、僕は君に出逢うことになる。

君は渡し守、僕は見つめて。

僕「あれ？」

「どうなったんだっけ？」

「全然覚ええないや・・・」

そんなことを考えながら、やけに重たい体に鞭打って、僕は起き上がる。

そんな時、僕の耳元で、誰かが囁いたんだ。

？「大丈夫？　大丈夫？」と――――。

僕「え？」

「ああ、大丈夫だよ」

僕は、誰かもわからない相手に返事した。

？「そうよかった」

「あなたは無事じゃないと・・・」

それは、どこかで聞き覚えのある声だった。

僕は、どうしても気になってしまって、声をかけてきた女性の顔

を覗き込んだ。

僕「あっ!？」

思わずこぼれてしまった、僕の言の葉。

『やっと、やっと、君に出逢えたんだ』

あれから、“生きていたら”という外見を・・・

僕と同じように、あの世で成長してきた君に出逢えた。

そう思っ、僕は次なる言葉を放とうとする。

僕「久しぶりだね」

君「ええ、そうね・・・」

「でも、こんなに早くあなたが来るとは思わなかったわ」

僕「ああ、そうだね・・・」

「けど、成長した君にまた会えたんだから、それでいいや」

君「そうね・・・」

「けど、あなたはまだ死んでないわよ？」

「これから、元の世界に戻るのよ!」

「ここは、三途の川の一步手前だから、まだ元に戻るわ」

僕「そんな必要はないよ」

「僕の願いは叶ったんだから・・・」

君「いいえ、あなたは戻るべきよ」

「そして、教えて欲しいわ!」

「私が見ることのできなかつた世界を・・・」

僕「そうか・・・」

「また僕は、君のために生きるんだね」

「君は僕より早く死んだのに、ここで成長を続けてたんだね」

君「ええ、私はあなたのことをずっと見ていたわ」

「ここで渡し守をするようになる前から・・・」

僕「ねえ、その渡し守は仕事なのかい?」

君「そうよ・・・」

「これが、私の仕事なの・・・」

僕「そうか・・・」

「だったら、僕も仕事に戻るとするよ・・・」

君「行ってらっしゃい」

僕「行ってくる・・・」

これが二度目の、君との出逢いだった。

目の前にある広大な野原。

「うう・・・」

そう言って、僕は一人、目を覚ます。

事故の時に、腕の骨が折れたらしい。

“ズキズキ”して痛い。

けれど、彼女に逢えたから、満足である。

人生には少しの犠牲が付き物だ。

そういうわけで、仕方がないということにしておこう。

僕は、それからしばらくして退院した。

それから、幾度となく君を思い出した。

『逢えないかな？ 会いたいなあ』

そんなことを、いつも思っていた。

そんなある日だった。

僕は大学に行く用意をして、洗面所の鏡を見ながら、髪をセットする。

これは、自分としては面倒くさいし、趣味でもないけれど、《大學生であるから》という理由で、一応やっていた。

そんな時だった。

ワックスを手につけ、洗面台に置こうとした時、僕は間違えて落としてしまう。

その時に、僕を光が包み込んだ。

「うわぁ！」

僕は、咄嗟に声を上げる。

「何なんだ？」

そうとも言った。

だが、それに答える人は誰もいない。

ただ、僕が気付いた時点で、目の前に広がるのは洗面所などではなく、広大な野原だった。

鏡の国で、僕は君に。

『ここは何処だ?』

僕は、そう心の中で呟いてみる。

すると、後ろから声がした。

「ここは、死後の世界ですよ」と――――。

『誰だ? 俺の心を読んだのは!?!』

そう思いつつ、後ろを振り返る。

すると、そこにいたのは彼女だった。

「え?」 そう、思わず言葉が漏れる。

「なんで、君が?」僕は、そう言った。

君「あなたも可笑しな人ね・・・」

「さっき言ったでしょう?」

「ここは、死後の世界・・・あの世なんですよ?」

「だから、私がいても何の不思議もないでしょう?」

「あなたこそなんでここに來たの?」

僕「わからないよ」

「ただ、洗面所でワックスを使っていたら・・・」

君「落としたんでしょう？」

「ちゃんと、見てたわよ」

「本当、昔からどんくさいのよね」

「あなたっていう人は・・・」

「本当、何も変わらないのね・・・あなたっていう人は・・・」

僕「悪かったね・・・」

「進歩のない人間で・・・」

君「そういうことを言っているわけじゃなくて・・・」

「ただ、私が生きていた時と変わらないのが嬉しくて・・・」

「ありがとう・・・変わらないでいてくれて・・・」

僕「何もしてないよ・・・」

「ただ、たまたま変わらなかっただけで・・・」

「君のことを忘れられないだけで・・・」

それから、いくつもの想いを交わした。

僕は君のことが好きで、、君もいつしかそんな僕を好きになっ
ていて、、

そんなことを想い、お互いに言葉を交わした。

叶わなくても、君が好きで、 逢えなくても、君を想い続けて。

その想いがやっと伝わって、両想いになることができた。

僕はそれが嬉しかった。

それから、いくつかの日が過ぎて、僕は気が付いた。

話が適当に終わった後に、適当な感じで元の洗面所に戻された僕。

だから、僕はもう一度彼女に逢いたくて色々なことをしていた。

なぜ逢えないのか？ この前は逢えたのに・・・？

もう一度逢いたいと、あの時のシチュエーションを何度も繰り返す。

するとある時だった、、

“バシユッ”

そんな音の中、僕を光が包み込むと同時に、僕は洗面所から消えることになる。

鏡の国で、僕は君に。（後書き）

この6話は、極端に？長いですね。

ムラがあつてすみません、、、

もう一度、君に逢いたくて。

君「また来たのね・・・」

僕「ちょっと、君に逢いたくてね・・・」

君「嘘つき!!」

「ずっと、ワックスを落とし続けていたくせに・・・」

僕「ばれてたか!!」

ここで僕等は笑い合った。

こんな時間がいつまでも続けばいいのに・・・。

まるで、そんなことを想っているかのように・・・。

僕「あのさ、死んでも人は成長し続けるのかい?」

君「私を見ていればわかるでしょう？」

「たとえば生きている側から見えなかったとしても、私達は共に成長してるのよ」

僕「じゃあ、年を取り続けたら死ぬのかい？」

「そして・・・もし、死んだらどうなるんだい？」

君「死ぬわよ・・・人は生きている限り・・・」

「でも、死んだらどうなるかまでは知らない・・・」

「わからないわ・・・」

「だって、生きている間は、死後の世界なんてわからなかったんですもの」

「だから、これからなんてわからないわよ」

僕「そうだよね・・・」

「確かに、そうだよね」

「じゃあさ、約束してくれないかい？」

「次の世界でも巡り合えるなら、僕と結婚してくれるって・・・」

「いつ、出会えなくなるかわかんないんだから・・・」

君「ええ、もちろんよ・・・」

「愛の証なんていらなくてもいいけれど、それでもあなたとは一緒にいたいもの」

「だから――――――」

彼女は、最後になんて言ったんだろうか？

昔の記憶過ぎて、思い出すがもうできない。

寂しい話ではある。

彼女は17歳で死んでしまったのに、僕はずっと後に死ぬなんて。

この命、半分でも良いから、君にあげたかった・・・。

それが叶わないなら、僕の命を全て君に捧げたかった・・・。

けれど、僕達は神じゃない。

だから、願うことはできても、叶えることはできないんだ。

だけど、次の世界で一緒になるということは、終わった事ではない。
い。

そう、、、全ては、始まりなんだ。

だから、僕は安心して、そっちに逝くよ。

もう一度、君に逢いたくて。（後書き）

文字数も少なく、言葉足らずであり、文才もない私でしたが、最後まで読んでくださり、嬉しく思います。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686y/>

行ったり来たり～君と僕とのRendez-Vous～

2011年11月15日01時01分発行